



リシンク この街から、Rethinkして未来を変えていく。



街の課題を、考える。話し合う。

そこに住む方々、そこで働く方々、そしてそれを支える自治体の方々と一緒に。

それは、よりよい明日のために。

Rethinkフォーラムは、地域にゆかりのある方や、テーマにピッタリなゲストをお招きして、

地域社会の課題解決に向けたディスカッションをする場。

ちょっとだけ視点を変えてみることで、違った景色が見えてくるかもしれません。

この先も、この街が魅力的で活気にあふれるように。一緒に、Rethinkしませんか？

リシンク Rethink

視点を変えて考えること。

**Rethink**
PROJECT

テーマ

Rethink 秋田 ～持続可能なまちづくり～

「Rethink秋田～持続可能なまちづくり～」をテーマにしたフォーラムが7月31日、秋田市の秋田キャッスルホテルで開催されました。秋田市は新たな市長の誕生で、人口減少対策をはじめ、子育て世帯や若者、現役世代へのサポート、誘致企業の増加、さらには観光誘客も含めヒト、モノ、投資を大胆に呼び込むなど、市政の刷新が期待されています。これからの秋田市が、住みよいまちとしてさらに発展していくために大切なことは何か。秋田市長の沼谷純さん、全国飲食業生活衛生同業組合連合会会長の齊藤育雄さん、日本たばこ産業秋田支社長の半田貴志さんが、持続可能なまちづくりについて語り合いました。モデレーターは、フリーアナウンサーの武藤綾子さん。それぞれの視点から秋田を「Rethink」した鼎談の内容を紹介します。



プロフィール



沼谷 純さん(秋田市長)

1973年、秋田市出身。秋田大学教育学部卒業後、秋田県庁に入庁。2011年、秋田県議会議員に初当選(当選4回)。21年、秋田市長選挙に落選するも、今年再挑戦。見事に勝利し、秋田市長に就任した。



齊藤 育雄さん(全国飲食業生活衛生同業組合連合会 会長)

1951年男鹿市生まれ、秋田経済大(現ノースアジア大)卒。2009年から県飲食業生活衛生同業組合理事長。全秋連では、理事を経て14年から副会長を務め、24年6月から現職。秋田市・川反で居酒屋「秋田乃瀧」を営む。



半田 貴志さん(JT秋田支社長)

1972年、井川町出身。秋田経済法科大学付属高校→早稲田大学社会科学部卒業後、JTに入社。仙台支社配属となり社会人野球で活躍。その後北海道支社営業総務部長、東京支社東部第三支店長(千代田区統括)、宮城支社副支社長を経て、2024年4月から現職。三十数年ぶりに秋田に戻る。



武藤 綾子さん(フリーアナウンサー)

1975年、秋田市出身。立命館大学卒業後、秋田テレビにてニュース番組のキャスターや報道記者として経験を積む。現在は仕事と子育てを両立しながら、司会業やセミナー講師などフリーアナウンサーとして活動。

テーマ01 持続可能なまち

【武藤】沼谷市長が考える「持続可能なまち」について教えてください。

【沼谷】地域の持続可能性を支えるのは、そこに「人が暮らし、生まれる人」が居続けることです。「ここで暮らしたい」と思ってもらうためには、仕事やインフラ、子育て支援など総合的な政策が欠かせません。加えて、飲食業を盛り上げ、新たな企業を誘致することで、地域にフラスの循環を生み出します。

観光面では、現在首都圏でオーバーリズムが問題になっていますが、その分地方には大きなチャンスがあります。秋田市は陸・海・空のハブという強みがあり、多くの人を呼び込む可能性を秘めていると思います。

【武藤】飲食店経営者であり、全国飲食業生活衛生同業組合連合会、秋田県飲食業生活衛生同業組合理事長を務める齊藤さんは、どう考えますか。

【齊藤】飲食店はまちの一部ですから、まずはお店を継続していくことが大切です。今はSNSや口コミの影響力が非常に大きい時代。他になにか代わりを持った店づくりをしなれば生き残れません。長く続く店は、独自のメニューや丁寧な接客など、オンラインの魅力を磨いています。同時に、お客さまに飽きられないよう、一部を新しくする工夫も必要です。

ただし、一つの店舗だけ頑張っても地域全体の活性化にはつながりません。最近では若い世代の開業も増えています。新しいアイデアを取り入れながら、飲食店街が連携してイベントなどを行うことも重要だと思います。

【武藤】多様な人々の共持という視点から、沼谷市長はどのようなまちづくりを考えていますか。

【沼谷】それぞれが異なる価値観を持つ暮らしの中で「あれかこれか」という二者択一の時代は終わり、「あれもこれも」を受け入れる時代になっていると感じます。二項対立ではなく、双方が共存できる形を考え、難しくいかると諦めず、どう実現するかを模索することが大切です。

例えば移動手段といえば、自家用車やバス、タクシーといった公共交通など、多様な手段を組み合わせて地域の交通を維持する。そんな「ミックス型」の発想が必要だと思います。

【武藤】持続可能なまちには「安心して暮らせる環境」が欠かせません。安心があれば消費も活発になると思いますが、最近は飲食店での支出が減り、若い世代のアルコール離れも進んでいると言われます。齊藤さんはどう見えていますか。

【沼谷】若い人のアルコール離れは10年ほど前から顕著で、コロナ禍でさらに加速しました。高齢者は家族が定着し、飲み会の価値観も変化しています。

そこで私たちは、高校に向い出前授業を行い、飲食業の仕事に興味を持ってもらい、後継者育成につなげようとしています。プロの料理人が目の前でフレンチ料理や和食、中華を調理する様子を見た生徒が、調理学校へ進学したりホテルに就職した例もあります。こうした実体験は子どもたちに大きな刺激になると感じます。

【武藤】JTでは、安心して暮らせるまちづくりのために社会貢献活動にも力を入れていると伺いました。具体的にどのような活動がされていますか。

【半田】2004年から全国各地で、市民参加型の清掃活動「ひろえば街が好きになる運動」を展開し、お祭りやイベントで地域の皆さんと連携しながら「ひろう」体験を通じて「つなぐ」気持ちを持っています。

秋田支社では独自の「フードバンクあきた」と協力し、県内の福祉協議会に集まった食料品を営業車で運搬する活動を行っています。さらに、県立大学の学生と一緒に戸浜へのゴミ拾いにも取り組んでいます。地域社会の員として、少しでも役に立ちたいという思いで続けています。



出戸浜での清掃活動の様子

テーマ02 若者支援

【武藤】沼谷市長は日本の若者支援を掲げていますが、具体的にどのような取り組みを考えていますか。

【沼谷】秋田市には国立・県立・市立・私立を合わせて7つの大学があり、約7,000人の大学生が暮らしています。そのうち7割が県外出身者です。これまで行政は、県外へ流出した若者を呼び戻すことに力を入れてきましたが、これからは秋田に来てくれた若者に、地元の魅力を知ってもらい、関わってもらい、そのうえで「ここへ頑張りたい」と思ってもらえる取り組みが必要だと思います。

例えば、起業やスタートアップを目指す若者への支援。飲食店を開きたい場合でも、いきなり借金をして店舗を構えなくても試せる仕組みづくりを検討しています。やりたいことがまだ見つからない学生に向けては、中高生の職業選択の幅を広げるために、企業と連携して多様な職種を体験できる「クワイ」制度のような仕組みも面白いと考えています。

【武藤】齊藤さんは経営者として、若手経営者や学生アルバイトと接する中で、若い世代が活躍するために必要なことは何だと感じますか。

【齊藤】アルバイトの学生にまず教えるのは、基本的なマナーです。特に大学1年生は固定電話に出られない子が多く、まずは電話対応や元氣なあいさつから始まります。1年経つ頃には、注文取りやお客さまとの会話もスムーズにできるようになります。

仕事の現場ではマニュアルにない状況が多々あります。そこで自ら考え、学び、対応する力が育ちます。社会に必要なスキルはやはりコミュニケーション能力ですから、若いうちに磨いておくことは大きな財産になります。

【武藤】JTではスタートアップ支援のプログラムを立ち上げた伺いました。

【半田】弊社のコーポレートR&D組織「DLAB(ディーラボ)」が、株式会社リバナスと協働で、新たな事業創出を支援するプラットフォーム「D.O.(ディーオー)」を今年6月に立ち上げました。

DLABはJTグループのバリエーションの豊かさを、もつとを実現するために、心の豊かさを研究・探索する組織です。これらの活動の一として、革新的な事業が生まれるには「事業化前のアイデア段階」Dayoの探求が極めて重要だと考え、この段階に特化した支援を体系的に行うのが「D.O.」です。

科学技術や専門性、創造性を持つ研究者・起業家・クリエイターに向け、教育プログラムやグラント(賞金)、投資、事業伴走など、多角的な支援を提供します。まだ始まったばかりですが、「心の豊かさを実現する新たな事業の創出につながることを期待しています」。

テーマ03 未来へ向けた発信

【武藤】ここまで「持続可能なまちづくり」について伺ってきました。シニアも若者も子育て世代も、多様な人々が安心して暮らすことができ、若者を中心に経済が循環する。そんな未来像が見えてきました。最後に、より良い秋田の実現に向けて、県民の皆さんのメッセージをお願いします。

【沼谷】秋田県全体では人口減少や過疎化、若者流出といった課題があります。一方で、地球温暖化の影響で首都圏の暑しさが厳しくなる中、都市が農村かの二択ではなく、互いの良さを生かす生き方が自然に広がっていくはずです。

秋田市は人口約30万人の、働く場所も学ぶ場所も遊ぶ場所も食の魅力もそろった「まち」といえます。行列や渋滞もなく、暮らしやすい環境があります。時代の変化を前にきに捉え、チャンスに変えていく気持ちでまちづくりを進めていきたいです。

【齊藤】「まちを何とかしたい」という30、40代の若い経営者が、かつて私が旭川にウッドデッキを作った際の話を聞きに来たことがあります。資料やデータはすべて提供し、進め方もアドバイスしました。

千秋公園のお堀にきた浮き橋のように、思い切ったアイデアが「行ってみよう」を促す。人を呼び込みます。新しいことに挑戦する若者は全力で応援したい。一人ではできないことも、仲間をどう選び、どう組むかで実現できます。

【半田】沼谷市長の「地方にチャンスがある」という考えや、変化を前向きに受け止める姿勢に共感しました。また、齊藤会長のオンラインの店づくりにも秋田ならではの可能性を感じます。